

研究所的ラッキースケベが起こって、試作品の疑似アナルが助手のそれと完全に繋がってしまった

体験版

攻め：志村

受け：溝口

要素：拘束、玩具、前立腺責め、ドライオーガズム、連続絶頂、自慰、電気責め、結腸責め

「いやはや！これはまた素晴らしいものが出来てしまったんじゃないか！？」

光沢感を帯びた筒を蛍光灯にかざし、自画自賛する。試作に試作を重ねただけあって、苦勞もひとしおながら、大変良いものが出来上がった。

今回発明したのは、対象者のアナルと繋がるオナホールだ。以前開発した「対象者の性器と繋がるバイブ」が市場で好評を得たので、それをまるごとアナルに応用したものになる。ただしこれを完成品とするには、まだ大事な工程が足りていない。

そう、実験だ。本物の肉体を通しての安全確認、及び動作確認をする必要がある。では、誰に試すかと言えば、アナルでの実践も豊富な助手に決まっている。

「よし、早速溝口君で試してみよう！私はお尻の経験そんなにないし、彼ならきっといいアドバイスをくれる」

ただし、実験を行うにあたって問題がある。私の優秀な助手である溝口君は、過去の実験のせいで発明品のモニターになることを拒否しがちだ。既に開発段階で何度かモニターになってほしいことを匂わせていたが、すべてきっぱり断られている。そのため、いざ本気で実験段階となった今、彼に直接交渉したところですねんり受け入れられるかは怪しい。

とはいっても、身近な適任者は彼だ。やはり諦めずにトライしてみるかと、試作品を握ってドアへと向かう。

「まあ、一応試作品はできたからね！ものは試しに、言うだけ言ってみよう！いざとなったら奥の手も用意してるんだし！」

しかし、完成間近となるといささか冷静さに欠ける。なのでいつもとは異なり、ドアの開閉に何一つ注意しなかった。おかげさまで駆け足になっていた私と、開いたドアから出てくる人物が、真正面から激突した。

「失礼します。博士、先日からお伝えしていた、輸入素材の価格の件なのですが——！？」

「おわあああ！！？」

ドン、とお互いの体が強くぶつかり、各々後方に倒れこむ。大きな物音を立てて尻もちをついた私は、慌てて腰を浮かせて自分の臀部を労わった。しかし、両手が空いていることに違和感がある。そうだ、私はさっき、何かを握りしめていたはず。

そしてあたりを見渡した時、無残に転がるオナホールを見つけた。

「い、たた…。って、あ、あああああ！」

ささっと四つん這いでオナホールのもとに駆け寄った。幸い、見た目に大きな傷などはない。ただ、元々このオナホールは全体的に柔らかい素材で出来ているので、挟んだり、落としたりした衝撃では破損しにくい。だから私が叫んだ理由は他にある。なんとこのオナホール、対象者とリンクさせる条件を「相手に強く押し付けること」にしていた。

私はオナホールを手に、わなわなと震え上がる。落としただけならいい。でも私は、咄嗟に自分の体をかばった気がする。もしオナホールが溝口君と自分の体の間に挟まったとしたら、どちらかの体に強くぶつかっている可能性が高い。

まずいぞ。まだどれほどの効果が出るかも未検証だというのに。一体、どちらに先にぶつかったんだ！？私だったらまずいんだが！？と、試作品を握りながら最悪の事態を想定した。

そんな私の様子を、隣にしゃがんだ溝口君が不安そうに見つめている。

「僕の不注意でぶつかってしまい申し訳ありません。ところで、なんですかそれは」

「あっ！？これえ！？こ、これは、そのお…」

さらに具合の悪いことに、溝口君に交渉する前に試作品を見られてしまった。リングや棒ならいざ知らず、あからさまにオナホルの見た目をした発明品だ。これを目にして、溝口君が不審がるのは否めない。

「これは試作品でね！？ちょっと溝口君に見てもらおうと思ってたんだけど…」

場を繋ぐ開発秘話を適当に捏造しながら、私は迷っていた。オナホールに関する真実と嘘、どちらを告げるかを。試作品を手に持ちながら彼にぶつかったので、意図せずどちらかのアナルと繋がってしまった。さて、これを白状するか、内緒にするか、はたまた誤魔化すか。

だが、私は彼の様子を見て賭けに出た。なぜなら溝口君は、珍しくやってしまった、という顔をしている。自らが実験体となることに関しては消極的な彼だけれど、基本的に彼は私の開発をサポートしている。そのせいか、自らを原因とする今回の事態を勝手に重く考えているようだ。なるほど。君が落ち目を感じているなら、それをうまく利用させてもらおうじゃないか。

「一応、ぶつかるタイプの衝撃には強く設計したつもりなんだけどね！落下の衝撃にも耐えて動作が出来てるか、ちょっとだけ試したいんだけど！溝口君、もちろん付き合ってくれるよね！？」

がしりと、オナホールを握っていない方の手で彼の手を握る。これは協力を促す手ではない。逃がしませんよ、の意図を込めている。そして通常であれば、溝口君から冷徹に振り払われる手でもある。

しかし、今回はイレギュラーだ。なんと溝口君は自ら握り返して、意を決して私を見つめてくるじゃないか。

「...確認不足でドアを開けた、僕にも責任はありますので。動作実験、ぜひ僕に協力させてください」

えらく真面目に返事を返す彼を見て、勝ったな、と思った。あとは溝口君のことが、ちょろすぎて少し心配にもなった。

「ありがとう溝口君！じゃあ早速、実験室に向かおうか！」

そう言ってウキウキと立ち上がる私と、なんとも言えない表情の溝口君が部屋を出る。向かう先はもちろん、例の椅子がある実験用の部屋だ。

しかし、実験協力者の態度はすぐに変わった。溝口君を手足が拘束できるよう開発した椅子に固定してから、白衣にしまっていた試作品をもうひとつ取り出した

ところ、なぜか彼が急に暴れだしたのだ。もう手足を拘束したので関係ないが、今更どうして不満があるというのだろうか。

「ちょっと博士！試作品が他にもあるなら先に言ってくださいよ！」

「私は別に、これしかないとは言ってません。それに、まぐれで出来たんじゃないって分かるまで作るのは当然でしょ」

「僕はひとつしかないと思ったので、実験に協力すると言ったつもりでしたが」

「なるほど。では私たちの間に、認識の相違があったみたい」

どうやら溝口君は、自分がこの世で唯一の試作品を壊したかもしれないという負い目から、実験を請け負ってくれたらしい。ただし、今回の実験はオナホルの耐久値を調べるためのもの。仮に試作品が複数あっても、テストは必要なことだ。ここは文句があっても引き受けてもらう。

しかしながら、わめく彼を屁理屈で説き伏せたとしても、懸念は残る。溝口君と私に挟まれたこのオナホールが、どちらのアナルと繋がっているか、という点だ。確かめるには穴に指を入れるのが早いけど、もしも自分だった場合を考えると恐ろしい。

「ただなあ、何個かあるっていてもなあ。疑惑の一個ができたのは非常に良くないね」

「故障したかもしれない、ということですか」

「いや、多分動作は正常だと思うんだけど…。むしろ正常に動くことが問題というか」

「博士にしては、齒切れの悪い返答ですね」

「う～ん、でもまあいっか。まずは実験を優先しよう！」

とはいえ、私は芯の通った研究者だ。やはり自分の身に起こる不幸より、このオナホールを実験したい気持ちが勝つ。それに、2分の1の確率で、この穴は溝口君に繋がっていると思えば悪くない。

私は意を決して、自分の指にジェルをまとわせた。そして、本来は性器を入れるべき穴に、ゆっくりと指を埋めていく。もちろん、「溝口君のアナルに繋がれ！」と強く念じるのも忘れない。そして思いは通じて、私の尻にはなんの違和感も訪れなかった。かわりに目の前の助手が、ぐっと腰を浮かせて驚いている。実験成功の瞬間を見て、私は思わず頬を緩めた。

「う、ひっ！？や、なにっ、何がっ」

「あ～、そっかそっか、やっぱり溝口君のアナルになっちゃってたかあ」

「なっ...！？ま、まさか博士の持っているそれは...」

「そう！これは『対象者のアナルと繋がるオナホール』です。対象者に強く押しあてることで、感覚がリンクするようにしてみたんだよね。いやあ、危うく私のお尻と繋がるどころだったよ。危ない危ない」

「またあなたは、そんなことに技術を使って...！」

まさか自分のアナルとオナホールが繋がっているとは想像もしていなかったのか、溝口君の抵抗はより一層激しいものになった。けれど、もう手足は椅子に固定してある。文字通り手も足も出まい。

彼は嫌がっているが、このオナホールを検証するうえで、必ず使用感を確認する必要がある。この分だと、次に実験協力を依頼しても断られることが確実なので、できれば今回で複数の実験をこなしていきたい。

偶然ながらも、強く体に押し付けたり、男二人の体重で挟んだり、手元から落とす程度の衝撃では故障しないことは分かった。では次は、複数個を同時に使えるかを試していこう。

「毎度毎度実験を受ける僕の身にもなってくださいよ！それに、もう故障していないのが分かったなら、実験終了でいいですね？」

「ええ～！？まだ終わりたくない！もっと実験する！大体、君のその言い方もなんなのさ！記念すべき私の最初の実験に付き合えるのは、溝口君だけの特権なんだよ？嬉しくないの？」

「そっ、それは、光栄ではありますが」

「よし、じゃあ協力ついでにもう一個お願いします。はい、ちょっと失礼」

「うわっ！？」

事故にあったものとは別の、ポケットに入っていた分を溝口君の腹に押し付ける。これで無事に、未使用だった分も彼と繋がったことだろう。せっかくなので、まずは2個の同時使用から試してみることにする。

オナホールにも様々な種類があるが、今回は初めてのオナホール製作のため、幅広いニーズに応えられるようにした。あえて非貫通式にしたことにも、もちろん理由がある。私は両手にオナホールを持ちながら、キャスター付きの台のある方へと移動した。そして台の上に、2つのオナホールをべちんと貼り付ける。

「見たまえ溝口君！なんとこのオナホールは、平面に取り付けることができる！」

「...確かに、そちらの台に固定されているようですが。平面に付くことが、どういったメリットをもたらすのでしょうか」

「通常オナホールというと、コンパクトなサイズなら片手で持って、性器に差し入れて上下させるイメージだね？もっと大型なものであれば臀部まで再現されている物もあるけれど、あれだと見た目にもサイズの的にも収納場所に困る。ただ、本当にセックスをしている実感を得るためには、腰をしっかり振りたい気持ちもあるね？しかし固定するために、小さいオナホールを布団や枕に挟んで使うとなると、安定性に欠ける。そこでこの、見事な吸着力の出番！なんとこれ、平面であれば壁にも床にも貼り付けられるので、ここに性器を入れて自慰をすることが可能です！」

「うああっ！！？」

今回オナホールを作る際、私がこだわったのは意外性と利便性だ。とにかく扱いやすいものを作るために、念入りに設計した。おかげさまで片手でジェルを入れてドバドバ押し出しても、全く微動だにしない。動くのは溝口君本人の腰だけだ。一旦中から溢れるまで注ぎたいので、もう少し中身を出しながら説明していく。

「ね！？ね！？見てよほら、片手で潤滑剤を入れても微動だにせず！ちょっと揺らしてもちゃんとくっついてる！ほら見て、回してもへっちら」

「ひあう、ん、あ、遊ばないで、くださ、ッ、ううん！」

「遊びじゃなくて実験です。うん、そろそろ中は潤ったかな。どう？実際ジェルが入ってくる感覚もある？」

「...ありますね。しかもちゃんと、別の方向からジェルが当たる感覚がします。ただ、自分が直接受けているものではないので、説明がない場合はかなり困惑しますが」

「なるほどね。じゃあ同時使用も問題なさそうだ。ところでどう？君のアナルは濡らしてないけれど、オナホールに指を入れたら、ジェルでぐちゃぐちゃの中をかき混ぜられている感覚になる？」

「ひいっ！！？あふ、う、ッ、んんンンっ！！？」

疑似アナルをジェルだらけにされると、溝口君の怒りのボルテージがまた一段階上がったようだ。怒られるのは怖いので、さくさく実験を進めていく。

無事に同時使用のテストは済んだため、次は感覚に関する実験に移行した。現段階で溝口君本人のアナルの中は乾いているけれど、オナホールからはジェルが溢れている。この時に指を入れて中をかき回したら、どんな感覚になるのかを試してみたかった。

まずは片方のアナルに、1本のみ指を入れる。不思議なことに、熱を持たないはずのシリコンが温くなっていた。どうやら感覚だけではなく、体温までリンクしているらしい。

「うわぁ、すごいよ溝口君！中があったかい。君の体温を感じる！」

「ッ、発言が、気持ち悪いんですが...！」

「実験中に上司を侮辱するのはやめてください。それでどうなの？中の感じは」

「ん、ふ、っ、すごく、ぬるぬる、してて...っ！僕の中が、擦られてる、感じがします...！」

「じゃあ本人の状態とは関係なく、オナホルの状態が君の感覚にも影響を与えるみたいだね。ちなみに2つ一緒に使ったらどう？別々の指に弄られてる感じがする？」

「はあ、あゝ...ッ！！んあ、あ、まっ、ぺ、ペースが、早っ、ん、んんうううっ！！」

ぬちゅりと指を動かすと、苦しそうに息を吐く溝口君が、しっかりコメントを返してくれる。いらぬ言葉を口にするのはいただけないが、聡明な彼の感想が聞けるのはありがたい。このペースでどんどん実験を進めたいので、私はジェルが入ったもう片方にも指を入れてみた。

二つのオナホルから刺激を与えると、溝口君は快感に耐えかねて、ビクンと腰を上げた。その後一拍置いて、恥ずかしそうに唇を噛んでから、おそるおそる腰を椅子に戻す。彼の衣類を全くはだけていないのに、本人が感じているのが卑猥だ。

きゅう、と手を握って、切なそうに息を吐き出している。なんとも言えない目を自分の下腹部に向けて、ぎゅっと身を縮めようとしていた。そんなことをしても、元凶は私のそばにあるから無駄だ。せっかくなので事実を突きつけるように、より激しく指を動かしてみる。

「んふっ、ッ、は、はう、ッ、くうう...っ！！」

「すごいねえ溝口君。ちゃんと2倍気持ちよくなれてる？」

「こ、これ、っ、いつまで、するんです...！？んっ、もう、同時使用は、十分じゃ」

「まだまだに決まってるでしょ？はい、次は2本ずつでいくよ？」

「ふぁ、あああああっ！！？」

恥ずかしそうに私から目をそらしても、実験から逃げることはできない。身動きを封じたのをいいことに、私はそれぞれのオナホールに人差し指と中指を合わせて入れていった。そして、右手は指を前後ばらばらに動かし、左手は出し入れを繰り返してみる。

「ひっ、あ、あああっ！んんんっ、や、め、っ、あ、んゝ〜〜〜...ッ！」

「いやぁ、感慨深いね溝口君。君の感度を弄らなくても、このオナホールがあれば無敵なんじゃないか？」

「っ、それは、どうでしょうね...！」

だが、私は見誤っていた。溝口君は、今やヘッドハントが相次ぐほどの超優秀な助手に育っている。そんな彼が、不本意な実験に付き合わなくて済むような対策をしないわけがなかった。

なんと彼は、私が疑似アナルで大変気持ちよくしてあげている最中だというのに、バンバンバンと椅子を強く3度蹴った。だが、それくらいの抵抗で壊れる代物ではないと思って見ていると、何と肘あての先端部分がパカリと開き、謎のボタンが出てくる。私の改造時には、取り付けた記憶のないボタンが。

「んなっ！？なにそのボタン！？私は知らない！？」

「機械の改造が得意なのは、あなただけではありませんよ」

「なにっ！？」

慌てふためく私を見て、溝口君はニヤリと笑う。そして手元のボタンを押すと、彼を拘束していたバンドたちが見事に千切れていった。どういう技術なのか、私でも目に負えない。そして愕然としている間に溝口君が駆け寄り、すばやく台ごとオナホールを奪っていく。

「ああっ！？ちょっと！実験途中ですけど！」

「博士の考えることなんてお見通しです。それに、僕ばかりがこんな変態の実験ばかり受けるのは不服です。そんなに試したいなら、僕が博士のお尻で検証して差し上げますが」

「ぐう...！」

キャスターの付いた台を自分の背後に回して、ふふんと鼻を鳴らす溝口君に言葉を失う。助手の成長は喜ばしいが、まさかあの椅子に細工を施していたとは盲点だった。

しかし、彼も彼とて盲目な部分はある。勝ち誇ったように笑う彼もそうだが、私とて日々成長しているのだ。よって、不測の事態にうろたえる必要は全くない。不敵に笑う彼に対して、今度は私が強気に出る番だった。

「椅子の改造は見事だったね。腕を上げたじゃないか、溝口君。でも君、本当に読めているのかな？この天才発明家の頭の中が」

「博士は常に下品なことしか考えてないじゃないですか」

「そんなことはないでしょ！常に下品なこともない！全人類にとって有益です！こんなに真摯に研究している私に対しての評価がそれとは信じがたい...！ま、まあいいや。君の意見はさておき、横のモニターを見たまえよ溝口君」

しかし彼は、不穏な空気をたった一言で氷点下に変えてきた。なんて切れ味の鋭いコメントだろうか。私じゃなければ心が折れていてもおかしくない。彼はもともとこうだったのか、私が育んだ結果なのか。どちらにせよ、彼の成長を恐ろしく感じ始めている私がいる。

だが、彼がどのような言葉で切りつけてきたとしても、私が有利なのは変わらない。一方で、明らかに不利であるはずの私が強く出ることに、溝口君は怪訝な顔をした。ただし彼は素直な人間でもあるので、私の指示通り部屋の横にあるモニターに顔を向けてくれる。私はというと、ごそごと白衣をあさって、モニターのリモコンを操作した。

スイッチを入れると、画面にはとあるカメラの映像が映った。それを見た溝口君は、目が点になっている。それはそうだろう。なんせモニターに表示されるのは、複数本のコードが伸びた、試作品と全く同じ形のオナホールなのだから。

「同じ、試作品...？これは一体、いつの映像で...？」

「もちろん今だね。でも安心してほしい。オナホールの保管場所は一応ラボの中だよ。部外秘だから」

「今...？え...？そんな、だって」

「まあ落ち着きなよ。これは誰ともリンクさせていないフェイク品。溝口君とも繋がってないし、実験に先だって何個くらいローターが入るかを試した時のものを映しているだけ。でもこれから映すのは、とある条件を揃えたものなんだよね」

困惑気味の溝口君は、モニターから目が離せなくなっている。その彼の前に映る映像を変えて、別のオナホールを表示した。約2秒ほど同じ画面にしては、また別の画面に変えつつ、溝口君に映像のヒントを与える。

「これも、これも。あとはこれも。全部ある条件だけが揃ってる。なんだろうね、同じ条件って。気になってきたんじゃないかな、溝口君も」

「っ...！」

一つ映像を映しては、ぱっ、ぱっと画面を切り替える。その度に見えるのは、様々な玩具が用意されたオナホールの数々だ。まだそれぞれ穴に入っておらず、電源が入っていない状態ではあるけれど、賢い彼は悟ったらしい。

啞然とする溝口君の瞳には、さっきまであった勝気な部分は欠片も見受けられなかった。そんな彼にゆっくり近づきながら、モニターに映るオナホールに揃えられた条件の種明かしをしていく。

「僕は今日、溝口君とドアのところでぶつかったね。でもあの事故があらうとな
かろうと、今日のうちに君にこのオナホールを試そうとは思っていたんだ。で
は、優秀な君に質問です。どうして私が、実験日を今日に設定したと思う？」

「試作品がちょうど出来上がったら…。では、ないんですか…？」

「うん、それも間違いではない。でも、試作品そのものは今日以前に出来上がっ
ていてね。さっき手に持っていたのは、オナホールの素材に若干改良を加えたも
のだったんだ。仕組み自体は、もっと早くに完成していたんだよ。だけどやっぱ
り真の完成品を作るためには、どうしても実験がしたいわけだ。そのモニターに
は溝口君が適任だと思っていたけれど、色々あったから断られるんじゃないかと
心配だったんだよ、私は。だから、確実に実験できるチャンスを狙っていたの
さ」

「いつ、リンクさせたんですか…！？だって僕は、さっき初めて見て…！」

どさ、と膝をつく彼の肩に手をのせる。そしてがら空きになったキャスター付き
の台を、もう一度自分の方へと引き戻した。

「溝口君。君、昨日珍しく仮眠室でぐっすりだったね？仕事が立て込んでたもん
ねえ、いや、お疲れお疲れ。実はこのオナホール、強く押し付けた相手のアナル
と約24時間繋がる仕様でね。ちょっとその時、ぽんぽ〜んと押し付けて、10個ほ
ど別の疑似アナルを作っておいた。さっきの感じだと複数個の同時使用も可能と
分かったから、今度は何個くらいまでいけるか実験したいな」

「あ、あ…！」

分割されていくモニターに映る個数が増えるたび、溝口の顔が青くなる。きっと彼は、目の前の2個だけに注意を向けていたと思うので、まさにこれは寝耳に水の話に違いない。けれど、これだけの大規模な実験に付き合えるのだから、助手冥利に尽きるというものだろう。現に武者震いで、がたがたと震えている。

「君が実験の続行を承諾してくれるなら、個数もある程度制限しようじゃないか。でも拒否するなら、今からこの第2、第3のお尻を全部一斉にいじめるけど、どうする？」

「ッ...！」

私が脅し文句のような言葉で追い詰めると、溝口君はぎゅっと上着を握りしめて押し黙った。そのまま、瞳に軽く涙をにじませて、私を見上げる。ぐっと唇を噛みしめて悔しそうにする表情が、彼はやけにさまになると思う。

ただし、なんだかんだ負けず嫌いな彼は、すぐにイエスと返答したくないようだった。何度もモニターと私を交互に見た後、苦し紛れに言い返してくる。

「博士は、あれらが僕とリンクしているとおっしゃいますが。実は、すべてハッタリなのでは？画面に映っているだけで、本当はこの2つ以外の試作品は存在しないんでしょう？」

「ほう？なるほど。私を疑ってかかると。では偽物かどうか、君の身体で確かめてもらおう」

「ふぁあっ!？」

けれども、反論は0点と言ってよかった。私が自らの発明品に対して嘘をつくはずがないのは、溝口君もよくわかっているはずだ。それなのに疑ってかかるのは。まだまだ考えが甘い。

しかし、溝口君を教育するのも上司の務めだ。彼が立派な研究者になれるよう、微力ながら実験を通して手伝っていこうじゃないか。では手始めに、柔らかい突起がびっしり生えたシリコンを、疑似アナルの中に入れてみよう。

手元のリモコンを操作すると、画面の中の機械が動き出す。細い棒に取り付けたシリコンに、たっぷりとローションがかけられた。そして十分な潤いを伴って、オナホールの中に入っていく。画面をアップにすると、にゅりりり、とオナホールのふちに突起が引っかかっていくのを観察できた。今のところは簡易的に出し入れする設定だけにしているが、溝口君は動かしてすぐに、後ろを押さえてうずくまってしまう。

「はうううっ！！？んんうっ！んは、あ、や、これ、ッ、な、ああああ...
っ！！？やっ、博士っ、止めてください博士え！！」

「色々試したくて、種類豊富に用意したからなあ。どれから試していくか迷うなあ」

「っ、わ、分かりましたから、本当は全部本物って分かってましたから！あふ、ん、んっ、せめて、どれかに絞って」

「まあまあ！君が疑うのも無理はない。研究者として、常に疑問を抱く精神は大事だしね。それに、使用感を試したい気持ちもあるよね！でも安心してくれていいよ！溝口君が納得いくように、全部順番に検証していこう！」

「い、や、あああああああっ！はあっ、む、り、これ、これえ...ッ！」

「へえ～、でも意外。溝口君ってこういうのが好きなんだねえ。割と見た目グロイのに、クールな君がこうも悶えるとは」

「ッ、ぜ、全部...っ！擦られ、え、っ、うううんんっ！！」

「なるほど、360度に突起をつけたから、ふちも中もまんべんなく擦れていくのが気持ちいいのか。今後の開発の参考にしよう。こんなにいいなら、次は振動機能もつけてみようかな」

「あふっ、ッ、あ、あゝ あああっ！！んうっ、う、～～～ッッ！！」

彼に入れている玩具に、現段階では正式名称がない。なぜならば、そもそもこれは実験の息抜きに、3Dプリンターでどんなものが作れるだろうかと製作しただけの代物だからだ。だから仮に名前をつけるなら、「全方位刺激纖毛シリコン」とでも言うべきか。略称で、纖毛シリコンでもいいかもしれない。

纖毛と言っても、人体に生える毛ほど細くはない。イメージとしては、イソギンチャクの触手の方が近いものがある。ただし、素材が柔らかく柔軟性に優れているので、孔よりも本体が太いにもかかわらず、すんなりとかき分けて入っていく様子は見事だ。まるで猫が小さな壁の穴に入って行くように、ぬるりと姿が見えなくなった。特徴を最大限に生かしている様子は、これからの研究にも役立ちそうだ。

「いやあ、しかし見事にぬるんと入っていくねえ。お遊びで作ったから、太さ的にはキツいかと思ったけど心配いらなかったか。むしろ細すぎると、腸の圧迫に耐えきれないって可能性もあるな…。この辺を改善して、次はもうちょっと機能面も追加して…」

「ひう、んっ、んふっ、あ、あ、は、かせ、も、もお、これは...ッ！これは、十分データがっ」

「うんうん。話はあとで聞くからちょっと待ってね～」

「ッ、い、今、今聞いっ、は、はうううンンッ！！」

だが私が熱心にメモを取っていると、溝口君の喘ぎ声が増してきた。私からは見えないが、ヒダの隙間に至るまで、纖毛シリコンが彼の内部をまんべんなく刺激してくれているに違いない。しかし、初めから飛ばし過ぎも良くない。彼が落ち着いて感想を口にできるように、ゆっくりじっくり動かして擦ってあげよう。だが困ったことに、単調な動きであるにも関わらず、溝口君はとてもよく感じていた。以前と比較して、彼のアナルそのものが敏感に成長している気がする。君ってそっちの方向でも進化しているのかと感心してしまうけれど、ほどなくすると急にいきんで、へなりと床の上に丸くなってしまった。

「ッ、は、あゝ あああうううう...ッ！！！！ふ、は、ああ...」

「...？あれ、どうしたの溝口君。そんなにぐったりしちゃって」

「っ、っ...！！はか、せ、あ、あのっ、これ僕、ほんとに苦手、でえ...ッ！」

「ふうむ。息抜きで作った玩具にしてはかなり刺激적みたいだね。まあでも、今日のメインはこれじゃないからなあ。この纖毛シリコンの開発は後日付きあってもらうね。それじゃあこれは動かしたまま、次のオナホルの実験も追加しよう」

「なっ！？あ、や、やあ、ッ、止め、て、これ止めてくださ...ッ！あ、また、や、や、早い、早いいいっ！」

ぎゅう、と自分の孔のあたりを両手で握って首を振る溝口君には、既に先ほどの殊勝な様子はなかった。試しに少し勢いを早めて抜き差ししてみると、必死にもがいて刺激を和らげようとしている。ただ、いつもの椅子の上ならともかく、今回は刺激を受けている疑似アナルが別空間にある。彼本人が暴れても、刺激は全く弱まらない。考えれば分かりそうなものだけれど、本能的に暴れてしまうのだろうか。普段は冷静な溝口君が乱れる姿から、私もまた学びが得られる。けれども、悶える彼を眺めてばかりでもいられない。実験が止まっているので、私はシリコンの出し入れ速度を弱めた後、モニターの画面を変えた。そして、次なるオナホールに取り付けた玩具を操作する。

「さて、これは私もいつか販売に向けて使ってみたいと思っていた試作品でね。やっぱり最初に試すなら、溝口君にしたいと思っていたんだ！ぜひ君から、忖度のない意見が聞きたい！」

「ひっ！！？あ、あっ、なに、え、あ、あああああッ！！？」

2個目のオナホールの周辺には、ストローのような形状の棒が複数本伸びていた。その先端から、ぬっと蛍光ピンクの物体が出てくる。平たく細長い蛇の舌のようなそれは、筒の中に入っていたローションをまとめてぬめりを帯びていた。各々がランダムに動くよう設定しているそれらは、チロリ、チロリと疑似アナルの縁を舐め始める。舐める速度は緩やかなものから素早いものまで様々で、予測不能な動きは見ていて飽きがこない。

「蛇の舌から着想を得たんだけど、やっぱり見た目がちょっと地味に感じるね。細長い分強度が弱いから、あんまり長さが出せないのも今後の改善点ってところか。まだまだ今は試作段階なんだけど、実際の使用感はどう？」

「んう、う、ッ、あ、ほ、細い、何かにい...っ！舐め、られて、あ、あ、変な、感じにっ」

「なるほどなるほど。舐められている感覚はあり、と...。じゃあ位置を変えて、今度は内部も刺激していこうかな」

「ッ！！？やめてくださいそんなことっ！いや、入れないで、ひっ、ひううううっ！！！！？」

溝口君に感想を聞くと、疑似アナルの表面の感覚はあるようなので、次は内部の実験だ。現段階では舌そのものを動かすことは難しいので、今回の実験では舌とセットになっている筒の部分を動かして位置調整をする仕組みにしている。チロチロと上下左右に動いている舌たちを、徐々に孔の中心に移動させていった。モニターに映るオナホルの孔が、ひくん、ひくんと収縮している。ここもリアルに連動しているのは素晴らしい。ぜひともこの感動を最大化すべく、一気に3本ほど細い舌を入れてみよう。

ぐぐ、と孔に押し入れるように筒を動かすと、先端の舌部分がうまく入っていった。最長で5センチほどしか伸びないが、これで十分中は刺激できるだろう。ただし中の様子が見えないので、ここは溝口君の協力が必要だ。彼のアナルの状態を、ぜひ実況説明してほしい。

「よし、無事に入ったね。具合はどう？」

「〜〜〜っううう！！は、は、はっ、はひ、っ、く、うううう...！」

「ん？溝口君？黙っちゃってどうしたの？私は中の具合がどうか聞いてるんだけど」

「あ、あゝ、まっ、ッ、ふ、ううう...！やあ、だめ、これ、はあ、あ、あああああああ...っっ！！」

だが私の問いに対して、溝口君からの確な返事がこなかった。おや、どうしたのだとモニターから彼の方に目線移すと、ぎゅうっと丸くなる彼は、片手を口元に、もう片手をお尻の方に回して悶えているじゃないか。なんで回答を求めているのに口を塞いでいるのかと、彼の方にしゃがんで、口にある手をどけた。

「何してるの溝口君。君にはモニターとして意見を述べる義務があるのに。黙ってちゃだめでしょ」

「いあゝッ！？だ、め、だめでっ、んんっ、変な声、で、ちゃ...！」

「声は出してもいいから意見を言ってください。それでどうなの？お尻の中も舐められてる感じはある？」

「んは、あ、あ、あり、ます...っ！ふっ、うゝ、あ、浅いところ、が、いっばい、いっばいいいッ！やあっ、ぬる、って、され、あ、あうううっ！ぞわぞわ、が、止まんなく、な、あ、あゝ〜〜〜っっ！！」

「わ、わ、こらこら、私の足にしがみつかないで」

「も、とめでっ、くださ...！さっきのも、んう、う、もお、中が、僕の中がおかしくなるう...ッ！」

悶えていても意識はあるので、私が溝口君の態度に関して注意すると、彼はどうか使用感を口にはしてくれた。けれど、随分と感じているのか、実験の中止を促すのに必死だ。溝口君にしては珍しく、取り乱して私の足に縋りついてくる。よほど2つの機器の相性が良かったのだろうか。それとも、彼自身がアナルをぬるぬるのままに舐められる刺激に弱いのだろうか。それを問い詰めたいところだが、喘ぐのに精一杯になりかけていて、これ以上この玩具の感想を聞くのは難しそうでもある。仕方がないので、諦めて同時使用の実験のみを継続していくことにした。

実際、これから使っていく玩具はすべて市販の物で、私が製作したものではない。ならば玩具の刺激に対してのコメントは適当でもいいので、感覚の有無だけに注視すればいいだろう。それぞれ特性のある玩具を用意したので、彼自身も刺激の認知は簡単なはずだ。では手始めにと、3つ目のオナホールを画面に映す。疑似アナルの目の前にセッティングされているのは、紫色のバイブに似た玩具だ。しかしバイブ機能も兼ね備えているが、この玩具最大の特徴は、楕円形の先端に付いた穴の部分だろう。

「溝口君が辛そうだから、これからの玩具に関しては刺激を受け取れたかどうかを教えてくれるだけでいいよ。今から使っていくのは、女性器を吸うウーマナイザーのお尻版。このまま挿入すれば、大体君の前立腺の上になるようセッティングしておいたから、吸われたと思ったら教えてね」

「ッッ！！？や、そんなんっ」

「あ、でもリンクしたオナホールにも前立腺があるかは確認してないや。まあそれも含めて検証していこうか。最悪腸壁しかなくても、吸われてる感覚は分かるよね？」

「っ、では、も、もう吸ってくださ、入れたらすぐにっ」

「いや、それだと内部構造の確認がおろそかになる。一旦吸う機能は切った状態で入れていくから、前立腺の有無を先に確認しよう」

前立腺を吸引するバイブを見つけたとき、なんとも面白い発想だと思い、仕組みを調べるために分解用と使用する用、2個も買ってしまった。しかし使うのは今回が初めてなので、私自身もとても楽しみにしていた玩具でもある。

しかし、彼とつながるこの疑似アナルに、前立腺も追加されるのかを確認していなかった。自分の見落としに気落ちするが、よくよく考えたらそれも一緒に検証してしまえばいい。溝口君ならお尻の気持ちいい所の感覚は自分で覚えていそうだし、本当に優秀な助手で助かったと言える。ただ、当の本人があまり乗り気になさそうに見えるので、それは難点でもあるが。

「ッ、ど、どうして、そんな確認まで、僕が...っ」

「だって、前立腺が刺激されていることが感覚的に分かる人は貴重でしょ？溝口君にはそれが分かるんだから、当然協力してもらうに決まってる。早めに終わってほしいなら、前立腺に刺激が来た時すぐに答えること。分かったね？」

「ですがそれは、機械に頼らなくても分かることでは——」

「はい、それでは検証始めていきます」

「ひ、いや、ッんんううん！！？」

足元にいる彼は引き続き文句を言っていたが、有無を言わずに挿入した。小言につきあっていては、この先1000年かかっても私の実験は進まないからだ。

同時使用の確認に関しては、入れた瞬間の溝口君の反応からして、既に3個目のオナホールを同時に使っても感覚がリンクできていることが見て取れた。だが、それだけでは満足できない。私はどうしてもこの前立腺ウーマナイザーの実力を試してみたい。

私はこのオナホールを作る際、より本人と密に繋がるオナホールを目指した。だからこそ、細部まで本人のそれと似るように設計した自負がある。無事にリンクできているなら、きっと前立腺もあるはずだ。どこだ、どこだと、リモコンを操作しながら彼の疑似アナルの中を探っていく。

「どこだ…。前立腺…。前立腺…」

「はふ、う、も、もう、僕と繋がってるのは、分かったじゃないですか…！は、早く抜いッ、あ、あううッ！！？」

そして探し始めてから、1分足らずで自信の裏付けとなる声が上がった。溝口君の声がワントーン上がり、しまった、とでも言わんばかりに息を飲む声が聞こえた。しかし、今更隠そうとしても遅い。彼が演技をする前に、急いで同じところを突いて確信を深めた。今突いている場所が、オナホール内に発生した疑似前立腺であると。

「ほう、ここだね？ここが君の前立腺で間違いないね？」

「んあ、あ、や、やめ、っ、あ、あああ...！」

「よおしよおし、いい子だねえ溝口君。ちゃんと反応してくれたから分かりやすかったよ」

「ふ、うう、や、分かったなら、もう、これは抜いてもっ」

「ばっちりリンクしていると分かったのに、私が疑似前立腺を刺激しないで終わるとでも！？ダメですよ、溝口君。今から君の気持ちいいところを、玩具にいっぱい吸ってもらわないとねえ？」

「っ、嫌、絶対に嫌です！せめて他の機械にっ」

「はい、それではちゅうっとやっています」

「〜〜〜ッあゝ！！は、————っく、ん、ンふあっ！！？」

溝口君はまだまだ不満を抱えていたけれど、すべて無視して手元のリモコンを操作し、前立腺ウーマナイザーの吸引機能をオンにした。中が見えない分、玩具の動きの確認ができないが、画面上ではぎゅっとオナホールが締まったことが見受けられる。しっかりと前立腺に当たるよう調整したので、玩具の動作に問題なければ強めに前立腺が吸われているはずだ。ただ、吸ったからといってどうなるのかは、私にも分からない。だからこそ、聡明な溝口君で試したかったのだ。きっと彼なら、感覚的なことも分かりやすく言語化して伝えてくれるに違いない。

「私が自分の腕で試した時も、最強だと痕が残るくらい吸引力があったから、溝口君の前立腺も吸えてはいそうなんだけどね。どう？吸われている感覚はある？」

「あ、ああう...ツツツ！！？ひ、あ、あゝっ...！！あうううう...
ツツツ！！！」

ふむ、と顎の下に指を置き、モニターを見つめながら溝口君に問う。細かな使用感はともかく、吸われているかどうかの感覚に関しては返事があるだろうと、割とフランクに彼に聞いた。しかしながら、溝口君から何も答えが返ってこない。おや、これはどうしたものかと彼の方をみて見ると、床の上で身体をしなせたり、突っ張らせたりして、謎の動きを繰り返していた。しかも口が開きっぱなしになり、軽く舌が出るほどに感じている。

「あらら。ちょっと刺激が強かったかな？でもその感じだと、ちゃんと吸い付いてるみたいで安心したよ」

「うゝ〜〜〜っ！！ん、は、はうううっ！ふあ、あ、や、博士、や、あ、これ、これ一番、きつ、いいっ！」

「ん？いやいや、別に一番強い刺激にはしてないよ？でも興味があるなら、次は振動も追加していこうか！」

「ひいいゝ いゝ っっ！！！！？ああああダメダメダメっ！！なにこれ、何っ、あ、あゝ〜〜〜ツツツ！！！！？」

けれども熱心な彼は、なんと私に玩具に対しての質問をしてくれた。実験に対して意欲的な溝口君の姿勢に、心の中で拍手する。なんてことだ。普段は氷より冷たい空気をまとう彼が、より強い刺激ではどうなるのかと疑問を抱いている。その疑問には、ぜひとも体当たりでぶつかってほしい。

この前立腺ウーマナイザーには、吸い付きの他に振動機能も付いていた。そこらは未使用だったので、バイブ機能もオンにしていく。3段階の強弱があるだけのシンプルなものだが、彼が興味津々なので、最初から中の強度でいいだろう。

吸い付きに振動が加わると、溝口君の腰が床から大きく浮いた。頭とつま先を支点に、ブリッジをするほどのけ反った後、べしゃりと地面に腰が落ちていく。その後も右に左に身体を倒して絶叫し、涙でぐしゃぐしゃの顔を振り乱していた。

「いああああっ！！あああううう！！んんっ！だ、だめ、止めッ、え、ンンぎ
いいいいっ！！は、はっ、はう、強い、強すぎで、おゝ、ああああああ...
っ！！」

「すごいねぇ、お尻の中みっちり撫でられながら、小さい舌で舐められて、しかも前立腺も吸われてるんでしょ？その中で振動まで加わるなんて！絶対に人間では不可能な動き！こんな体験はなかなかないね、溝口君！」

「んふっ、ふ、ふ、ぐ、ううううっ...！！！」

けれども明らかに過度な快感が与えられても、理性を保てるのがうちの助手の強みだ。ただ、不満を爆発させた怒りの目線で、私をにらみつけるのは勘弁願いたい。思わず目を背けたくなる気迫だ。背後にナイフでも突きつけられたかのような寒気がした。日に日に眼光が鋭くなっているのはなぜなんだ。やはり疲労が原因だろうか、額ににじむ汗を拭う。

「そっ、そんな顔しなくても良いでしょ！これは世界初の実験なんだから！むしろ私としては、もっと感想が欲しいくらいなのに！」

「ッ、じゃあ僕が、ん、ぐっ！後日、博士にこの倍のオナホールを繋いで、同じ目に合わせて差し上げますが...！」

「いいいや、私はまだ、アナルに関しては初心者ですから！？ベテランの君の方が適任でしょ！？」

「ひ、っ、僕、だって...！んッ、べ、つに、好きでしている、わけでは...！」

「でっ、でも実際、昔より敏感になってる気がするよ！？ほらだって、私の指を入れても以前とは反応が違うと思う！」

「はううっ！？」

そして怒気をまとう溝口君は、般若を背負っているかのような空気を醸し出している。なんてことだ、恐ろしい、彼のペースに押し負けてはならないと、私は危機回避を図った。咄嗟に手元にあった、身近なオナホールに指を入れる。潤滑剤で潤った内部は、私の指を2本、なんなく飲み込んだ。軽く中を擦ると、溝口君はまたしても会話ができなくなる。よし、これで一安心だと、私はオナホールの中をかき混ぜて遊ぶ。

「んふっ、う、うう、ず、るい、ッ、は、はあ、や、あああ、うっ、うゝうううんん！」

「ほおら、気持ちいいねえ、指も入ったら喋れなくなっちゃうねえ？」

「〜〜〜ッ、っく、ふ、う、あ、あふ...っっ！！は、あ、や、だめ、も、ん、んゝ〜〜〜〜〜ッッ！！」

ぎゅう、と全身をいきませて目をつむる彼は、人を殺せそうな覇気を取り払うと、大変色っぽいと思う。これは若干親のひいき目のような部分があると思うが、普段の冷静で淡々とした彼を知る分、ギャップで余計にそう思うのかもしれない。

そして指を入れて分かったのだが、彼のアナルには複数の刺激がリンクしているはずだが、このオナホールの中には振動や吸い付きといった感覚は伝わってこないことだ。どうやら疑似アナルで感じた刺激は、オナホール同士ではリンクされないらしい。本人のみが刺激を受け取る仕組みになっているようだ。押しどころの問題かと思い、彼の前立腺を探して擦ってみても、やはり振動は感じられない。しかし体内の形状はオナホールに反映されるので、前立腺と思われる部分は他よりも膨らんでいて分かりやすかった。

「なるほど、溝口君の身体とリンクしているから、前立腺とか孔の縁はオナホールでも再現されるけれど、オナホールの状態は別のオナホールとリンクしないみたいだね。玩具の刺激は、溝口君だけが受け取れる仕組みなのか」

「んはうっ！は、は、あ、はか、せっ、ッ、指、それ、ん、んんっ！はっ、挟むの、やめて、くだ、さ...ッ！」

「ああ、ここ？うんうん、ちゃんとコリコリした感じがあってね、分かるんだよ、君の前立腺。あ、そうだ、せっかくだから最初のシリコンももう少し奥まで進めて、前立腺もなでなでしてもらおうか？」

「ッッ！！！？や、それはもうっ」

「いいよいいよ、遠慮しなくて！それじゃあゆっくり奥まで入れようねぇ」

「~~~~っ、は、ああああうううんん...！！」

自分が指を入れたオナホルの状態を彼に説明しながら、反対の手でリモコンを操作する。モニターに表示される映像を変えて、最初に纖毛シリコンの玩具を挿入した画面を選んだ。そのまま玩具をより深くに埋めていって、孔の入り口付近から、彼の前立腺に当たるよう調整していく。

「このあたりが君の前立腺だと思うんだけど...」

「はあああ...ッ！あう、ん、んんっ、や、お願い、しま、博士え...！そ、こ、あ、あ、嫌、嫌でっ」

「確かに擦るだけの刺激は味気ないか。大丈夫、これには回転機能もつけておいたからね。ゆっくり上下に動かしながら、優しく前立腺も撫でてあげる」

「かふっ！！？ああんんんうっ！！ひ、いあ、や、これ、あ、あああああっっ！！？」

うまく前立腺に当てられたようなので、私は先ほど使用していなかった、回転機能のボタンを押した。細かく上下に動く纖毛シリコンが、ぐるぐると彼の中を撫でまわしていく。他の玩具に刺激されて震える前立腺を、甘く、優しく撫でられながら、無数の突起にくすぐられている感覚が生まれるはずだ。にゅりりり、にゅりりりと彼の中を丁寧にかき混ぜるシリコンが、私から見えないのは少し残念だが、動けなくなる溝口君を見れば、効果は中々のものに感じる。

「くは、は、ひ、いいいいっ.....！！」

「あれあれ、溝口君ったら。動けなくなっちゃって。どうしたの？そろそろ限界かな？」

「は、あ、は...っ！」

足元にうずくまる彼は、あまりに気持ちいいのか、とうとう微動だにしなくなってしまった。彼が動かないならばと、私からしゃがんで声をかける。

ぎゅっと自分の腕を抱えて丸くなる彼は、ひく、ひく、と身体を痙攣させながら、悲しげに私を見つめてきた。その顔からは反抗心がすっかり消え失せている。はて、彼はどうしてこんなに追い詰められているのだろうと首をひねると、なぜかさらに悲しい顔つきになった。

「なんでそんなに泣いてるの？嬉し泣き？」

「っ、ち、が...！ああう、も、もお、ッ、あ、ああ、ごめ、なさあ...っ！」

「一気に入れたりしたら痛い？確かに、通常ならこの玩具を全部入れて、私の指まで入れたら質量的に裂けてしまうかもしれないね。そういうひきつれるような痛みがあるなら教えてほしい」

「は、あ、な、ないっ、ですが...！痛く、ない、から、逆にい...ッ！んは、あ、も、無理ですっ！止めてください、もお止めてええ...ッッ！！」

「なるほど、刺激は受けても、広がる感覚は増えないと...。よし、ありがとう、とても参考になる意見が聞けた！では次は私の指を抜いて、玩具だけで4個分試して行こうか！」

「なっ！？ちがっ、全部抜いっ、ンっ、んんんううううっ！？」

彼の顔を見たとき、もしかすると溝口君は私を慮るあまり無理をして、痛みを我慢しているのではないかと疑った。この試作品を完成品にするためには、安全に使用できるよう配慮しなければいけない。しかし、彼からは痛みはないと聞くことができ安心した。悲しい表情の理由は不明なままだが、痛みがないならよいでしょう。

実験のメモを取るためにもやはり両手を使いたかったので、私は一度オナホールから指を引き抜き、彼の性感を高める役割を玩具に引き受けてもらうことにした。4個目のオナホールをモニターに映してボタンを操作する。

あまり激しい玩具ばかりもどうかと思ったので、この玩具は比較的シンプルな作りだ。先端部が軽く曲がった細長い棒を、ゆっくりと彼の中に入れていく。曲がった部分でどこを刺激するかといえ、もちろん溝口君の前立腺に決まっている。

「ひっ、あ、ああ、や、あ、だめ、そこだめ、え、あ、あああっ！！」

「こりこりの前立腺を引っかけられるのはどんな感じ？単純な動きだけど、今の溝口君ならこれでも気持ちいいかな？」

「んは、はっ、〜〜〜ッ！！は、ほ、他の、は、せめて、止め...っ！！」

「え〜？だって止めちゃったら、前立腺がなでなでされたり、吸ったり震えたりする刺激がなくなっちゃうよ？入口の所を舐め舐めされるのもよさそうだったし、痛くないなら続行します」

「っ、ふ、ううう...！きゅ、け、したい、一回、休み、た...！」

「まだダメです。一通り試し終わってから」

「んんっ、んゝ、できない、もうできないっ、あ、あ、また、また、や、あああ
ああああ〜〜〜っっ！！あ、うううっ！！は、ひっ、とま、っで、やだ、も
う、もうううっ！！」

こり、こり、こりと、甘く前立腺を引っかき続けるのも、簡易的ながら人には難しい動きだと思う。速度や強度を、長時間一定に保つのは難易度が高い。しかも相手が動き、締め付けられるならなおさらだ。しかし私たちには不可能なことを、機械であれば可能にできる。いやはや、まさに文明の利器とは素晴らしいと、私はつい感動してしまう。

それに、指とは違ってバリエーションに富んだ動きができない分いまひとつかと懸念したものの、溝口君ほどの敏感アナルの持ち主にはいらぬ心配だったようだ。先ほど以上にビクビクしているし、これも相当感じているらしい。頼もしい助手に、私は今日も助けられている。

とはいっても、溝口君に試したいことはまだまだあった。それに今度は、溝口君本人の協力が必要不可欠だ。なので私は再びしゃがんで、彼の肩をトントンと軽く叩く。

「良い感じで実験を進められているから、次に移っていきたいんだけど、今すぐ立って動けたりする？」

「今、すぐ...っ！？うあ、む、無理です、そんな」

「分かった。では私が君を動かそう」

「ひっ！？」

でも、彼に動けるかを聞いたところ、溝口君はぎょっとして私を見上げてきた。何を言っているんだと言いたげな顔をしているけれど、私はただ動けるかを聞いただけなのに、なぜそんなに驚いているのだろうか。よくわからないが、本人曰く動けないそうなので、私が床に張り付く彼をひきずって動かすことにする。けれども不思議と抵抗してくる溝口君は、両脇に手を入れて引きずる私の白衣を握って泣きわめいていた。

「や、いやです博士っ！ひ、う、どこ行くんですか、何するんですかあっ！」

「大丈夫大丈夫、溝口君そんなに重くないから気にしないで。移動もこの部屋の中だから」

「ん、んううう、せめて、止め、て、お尻、も、おかしくう...ッ！」

「ちょっと気持ちいいからって嫌にならないの。次は君にとっても悪い実験じゃないから」

「嫌です、やだ、許して、もお許してくださいい...っ！」

うわあ、と声を上げてみっともなく彼は、いつもの溝口君とはかけ離れている。とはいえ、泣いても実験を続けたいわけにはいかない。むしろまだ、泣けるだけ元気ととらえてもいい。体力的に実験の続行は可能とみなして、彼を壁際まで引きずった。

そのまま一度彼を壁のそばに寝かせた後、自分のみ先ほどまで立っていたところに戻り、台の上に装着していたオナホールを取り外した。中が潤ったオナホールを手に、壁の近くで寝転がる彼の所に駆け寄る。

「お待たせ溝口君！今度はこのオナホールを使って実験していこう！」

しかし、意気揚々と私がオナホールを見せて彼に突き出すと、溝口君はふるふると首を左右に振った。

「ん？どうしたの、まさか嫌だって言うんじゃないよね？」

「っ、さ、っきから、嫌だとは、何度も...！」

「だって痛くないんでしょ？それなら別に問題ないと思うけど」

「痛みのほかにも、注視すべき点があると思いますが！とにかく僕は、実験の続行を拒否します！」

そして何とも生意気なことに、彼は堂々と実験拒否をしてきた。やはりところどころ、こだわりの強い溝口君の自我が出ている気がする。口では許してください、お願いしますと言う割に、実はへりくだってなどいないのが彼の姑息なところだ。

しかしながら、彼の態度がどうであれ、意見が聞ければそれでいいともいえる。

なので私は、少しだけ表情を硬くし、べちんと壁にオナホールを貼り付けた。

ちょうど溝口君が膝立ちになったとき、腰のあたりになる高さに。そして、何事かを見守る彼に対して、そっと手でオナホールの方を示す。

「よし、準備できた。平面なら壁にも取り付けられるのは、このオナホールの利点の一つだね。じゃあ溝口君も、おひとつどうぞ」

「ひとつ...？なにを、言って...？」

「おや、君にしては珍しく察しが悪いね。では実験に協力してもらっているし、私もお手伝いをしよう」

「ひゃっ！？な、何するんですか博士っ！やめて、やめてくださいっ！」

だが状況把握能力の落ちた助手は、普段の優秀さを見せつけてくれなかった。残念ながら、彼は私の意図を理解してくれなかったようだ。これには少々落胆したが、溝口君はあくまで協力者で、私の願いを聞いてくれている立場でもある。ならば私も、多少は彼に歩み寄らなければなるまい。

動けないと本人が言っていたので、私は彼の脱衣を手助けしてあげることにした。けれども溝口君ときたら、脱がなければ実験ができないというのに、私がズボンと下着を脱がせることをひどく嫌がった。足を閉じ、じたばたと暴れる。これでは次なる段階へと進めないなので、手荒ではあるが彼の動きを制限することにした。

「こらこら、なんで足を閉じるの。脱げないでしょそれじゃ」

「嫌なものは嫌です！それに、なぜ脱ぐんですか！？実験はこのままだもっ」

「せめて下半身は出してくれないと実験できないの。じっとしてくれないなら、玩具の動き激しくしちゃうよ？」

「~~~~~ッッッッ！！！！？ひぐっ、っ、あ、あッッ！！？」

暴れる溝口君を落ち着かせるために、動かしていた玩具の動きを速めた。すると彼は、ビクンと大きくのけ反って動きを止める。大人しくなった隙に、ベルトを緩めて一気にほかとまでズボンと下着をおろした。

「あぐ...ッ！！は、は、は...っっ！！」

「よしよし、大人しくなった。うん、いい子だね、そしたら脱ぎ脱ぎしちゃおうねえ」

「や、だ、め、だめ」

「ダメでも脱ぎましょう」

「うあっ...！！」

そして一息に下半身を露呈させたことで、溝口君が脱衣を嫌がった理由が明らかになった。なんと彼ときたら、あれほど嫌だ、無理だと言っておきながら、性器の周りには大量の精液がこべりついているじゃないか。太ももやお尻の方までべっとりと付着した精液は、下着の中でも糸を引いていた。同時に広がる濃厚なおいと湿度の高さに、君、何回イッたのと啞然としてしまう。

「うわ...。これはずいぶんと...」

「や、見ない、で、見ないで、くださ...っ！」

しかし、今日は彼に射精を禁じていない。あくまでオナホルの使用感さえ分かればよかったので、イクのは本人の自由だ。気持ちよくなりオーガズムに至ることは彼が健康な証拠であって、別に悪いことではない。

けれども、彼はイッたことを私に隠そうと必死だったらしい。そのため驚いて固まる私を見ると、溝口君は顔を真っ赤にして、ぼろぼろと涙をこぼし始めた。ただし、彼の痴態はまだ続く。なぜなら私がオナホールに入った玩具たちを動かした

続けるせいで、快感が蓄積しているからだ。下半身を晒してもなお、溝口君はなすすべなく感じて目の前で軽く射精するものだから、私としてはなんのショーを見せられているのか、という気分になる。

「はう、ッ、ああ、とめ、て、イッ、いや、ああ、で、る、イク、やっ、やああっ！」

「い、いや、君が感じているのは喜ばしいことなんだけど。まさかここまでイッてるとは思わなかった」

「〜〜〜ッ...！あはうっ！！や、だ、め、今やだ、ああ、や、やっ、嫌なのに、んう、うううう〜〜〜っっ！！」

ぽかんと顔を固める私の前で、溝口君はどうにか射精の瞬間を私に見せまいと躍起だ。膝を曲げて中心部を隠し、上着を下にひっぱり影を作りと、なんとか工夫する姿が愛らしい。だからこそ逆に、快感を拒む彼がひどく感じている様子を見続けていたい気持ちになってしまう。なんて男心をくすぐるのがうまい男なんだと感心していたが、ここで我に返った。

違うぞ、見とれている場合じゃない。溝口君が感じるのは無理もないことだが、それで終わっては実験が進まない。私が理性的でなくてどうすると、ぶんぶん首を振った。

「...っ、は！！ぼーっと見てる場合じゃなかった！溝口君があまりにも妖艶ドスケベで！つい実験を忘れるところだった。いやぁ、魔性だね溝口君」

「ぐっ...！もっとマシな言い方があるでしょう！最低、も、なんで僕が、こんな、あ、ああっ！」

「まあ、無事脱衣もできたし。他の玩具は弱くしておこうか。本命に集中してほしいしね」

ふう、と目をつむって深呼吸をする。エッチな助手もかわいいものだが、今は目の毒だ。実験に集中したいのは私も同じなので、一度モニターに映る玩具たちの刺激は弱めておく。

イキまくりの溝口君は、寝転がったままの状態なら手足を動かせるようだが、素早さはない。また、力も弱まって、足の踏ん張りもきかなそうだ。なので途中までは、私も力を貸すことにする。

射精後でぐったりと横たわる彼を、先ほどのように背後から持ち上げた。そして、壁に取り付けたオナホルの正面に膝立ちになるよう調整する。その状態で彼の性器を片手で支え、先端をオナホルの入口へと当てる。そのまま背後から、自分の体重で前に押し出した。

「え...？や、は、博士、ちょっとこれっ」

「はい、溝口君もおひとつどうぞ」

「んああああああああっっっ！！！！？」

ー続きは本編にてお楽しみくださいー